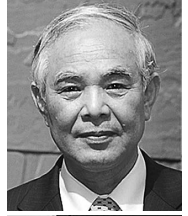


インターネット版天文学辞典

岡村 定 矩

〈東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1〉
e-mail: sadanori.okamura@emp.u-tokyo.ac.jp



縣 秀 彦

〈自然科学研究機構 国立天文台 天文情報センター 〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1〉
e-mail: h.agata@nao.ac.jp



半 田 利 弘

〈鹿児島大学理工学研究科 天の川銀河研究理工学センター／理学部物理科学科
〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-35〉
e-mail: handa@sci.kagoshima-u.ac.jp



日本天文学会の新しい事業として「インターネット版天文学辞典」を立ち上げた。この事業の発端である日本天文学会創立100周年出版記念事業「シリーズ現代の天文学」（2009年完成）から始めて、書籍版の「天文学辞典」製作からインターネット版に至る辞典製作の経緯と具体的作業を比較的詳しく述べる。インターネット版「天文学辞典」はようやく第一歩を踏み出したに過ぎない。われわれは、これから継続的な改訂を行ってより多くの皆様に使っていただき、この辞典が日本天文学会と社会をつなぐ大きな架け橋となることを願っている。是非とも皆様からの建設的なコメントと継続的なご支援ご協力を賜りたい。

1. そのものの始まり

—「シリーズ現代の天文学」—

岡村にとってこのインターネット版「天文学辞典」のそのものの始まりは、2002年にまでさかのぼる。この年の終わり近く、当時の日本天文学会の田原博人理事長から一通のメールが届いた。「日本天文学会創立100周年記念事業の一つとして、篤志家からのご寄付に基づき現代の天文学全体をカバーする教科書の出版を行うことになった。ついてはその編集委員長を引き受けて欲し

い」という内容だった。日本天文学会の創立100周年は2008年であり、これから5年以上にもわたる大事業を引き受ける責任は重大であった。

高校理科の選択科目である「物理」、「化学」、「生物」、「地学」の中で地学の履修率は当時きわめて低かった。必修科目の中学理科では、「物、化、生、地」の4分野が縦割りになり、その「地」の中ではさらに、「地震、火山、地層」、「気象」、「宇宙」が縦割りで扱われていた^{*1}。このような初等中等教育における天文（宇宙）の扱いを岡村は憂慮していた。高校の理科科目から「地学」を

*1 この状態は現在でもほとんど変わっていない。

なくして、その代わりに、「宇宙の中の地球に住む人間」という観点から自然界を俯瞰する「自然誌学」を作り、これを必修科目として、さらに「物理」、「化学」、「生物」のどれか一つを選択する。これが高校理科教育のあるべき姿というのが岡村の持論だった。しかし、このような主張はたいてい、「教えられる先生がいないから不可能だ」と一蹴されるのが常だった。

この編集委員長を引き受ければ、「自然誌学」の大学レベルの教科書、少なくともその手がかりにはなるようなものを作れないか。それを基にして、高校レベル、中学レベルの教科書ができるようになれば「教えられる先生」の養成にも役立つかもしれない。岡村はこの思いを実現することを自分の中での条件として、編集委員長を引き受ける決心をした。その結果が「シリーズ現代の天文学」の第1巻「人類の住む宇宙」である。

2003年3月には日本天文学会の評議員会で17名からなる編集委員が決まり、6月に第1回の編集委員会を開催して、17巻構成とすること、および各巻の編集者（編集委員+1-5名）を決定した。8月に出版社説明会を行い、企画案を提出した3社の中から11月に日本評論社を選定した。佐藤大器氏のもとでLaTeXによる編集に関して高い能力と実績をもつ編集部が存在が決め手だった。2004年7月には各巻の内容の第一次案をウェブに掲載し会員からのパブリックコメントを受け付けた。2005年3月の第4回編集委員会で第二次案と執筆候補者を確定し、6月に216名からなる全執筆者に依頼を完了し、これ以降は各巻ごとの責任編集体制を進めることとした*2。

一つの巻を多くの執筆者で分担することは、全体の統一感や読みやすさの点からは必ずしも勧められることではないが、「日本天文学会創立100周年記念出版事業」であるので、文字どおり「日本天文学会の総力を挙げた」形にしたいと考えた



図1 「シリーズ現代の天文学」全17巻。

のである。岡村の思いを詰めた第1巻は著者の絶大な協力により、シリーズの先頭を切って2007年1月に刊行することができた。しかし、その後の刊行は難航した。2008年3月23日に学術総合センター・一橋記念講堂で行われた記念式典時点での刊行は17巻中9巻にとどまった。東大理学部の小柴ホールで全巻刊行記念シンポジウムが開催されたのはその約2年後の2009年12月20日のことであった（図1）。

当時の日本天文学会事業報告には次の記述がある。『2009年12月に第11巻が配本され、創立100周年記念出版事業「シリーズ現代の天文学」全17巻の刊行をついに完了した。岡村が編集委員長を当時の田原博人理事長より依頼されたのが2002年、以来松田卓也、祖父江義明、土佐誠、國枝秀世と計5人の理事長の下で、執筆者総勢250人を超える事業を、まさに日本天文学会の総力を挙げて実施してきた。予定を大幅に遅れたことは遺憾ではあるが、ここに全巻刊行の報告ができることは大きな喜びである。』（抜粋）

2. 書籍版「天文学辞典」

「シリーズ現代の天文学」の制作に当たって、用語の表記や外来語とその和訳の対応、用いる数値の整合性など一定のルールを決める必要に迫ら

*2 最終的な述べ執筆者は250人を超えた。

れた。こんなときわれわれが参照するのは「文部省 学術用語集 天文学編（増訂版）」であったが、これでは役に立たないと思われる場面が多くあった。これは1974年に刊行された初版を増補改訂して1994年に刊行されたもので、刊行後すでに10年以上が経過していた。その後文部省内の組織変更もあり、新しい文部科学省で学術分野の用語を検討整理する体制はなくなっていた。学問の現状が十分反映されていないとはいえ、「学術用語集」は初等中等教育の教科書執筆において準拠すべきものとされており、教科書検定において問題が生じる事態にもなっていた。「学術用語集」が外国語とその訳語の対照表という機能だけしかもっていないことも不十分な点であった。

急速に発展する天文学分野の用語を整理しておくことの重要性は明らかであった。短い期間に天文学の全分野をカバーする教科書を出版するのは、このシリーズをベースに学術用語集を超えた「天文学辞典」を作る千載一遇の好機であった。この呼びかけに賛同した家正則、犬塚修一郎、小山勝二、千葉柁司、富阪幸治の諸氏および岡村を編者として辞典の制作がスタートしたのはシリーズ完成直前の2009年10月のことである。

当初はシリーズ17巻の総索引を作り、その項目を解説すれば良いと考えていたが、実際に総索引を作ってみると、それでは天文学辞典としては全く不十分であることがすぐにわかった。総索引は専門用語に偏っていて、一般の人々になじみ深い天文用語で含まれていないものが多くあった。また、装置名、天文台名、人名などの選択基準もシリーズの各巻ごとに大きなばらつきがあった。そこで編者一同で、シリーズの総索引から選んだ語を取捨選択し、総索引にはないが辞典として有用と思われる語を大幅に追加し、装置名、天文台名、人名などもなるべく一定の基準にそろえて加除を行い、約3,000項目を最終項目とした。シリーズの執筆者を中心に分野等を考慮して37名を選び執筆をお願いした。執筆はシリーズの記述



図2 シリーズ現代の天文学別巻「天文学辞典」。

を参考にすることが書き下ろしを原則とし、シリーズの別巻という形で出版することにした。

辞典では項目間で相互関連するものが多数あり、ある項目を執筆しようとするときに関連項目の記述を参照する必要がしばしばある。執筆と編集の効率化のために、サーバー上にWikiを立ち上げ、執筆はWikiで行い、編者と執筆者が常に執筆状況と内容を確認できるシステムを作った。日本評論社の佐藤大器氏とともにこのWikiに基づくシステムを立ち上げたのが小野寺宏臣氏の「クリエイション・パドレ」であった。このデータベースがインターネット版の制作に本質的な役割を果たした。2010年11月完成という今から見れば無謀な強行スケジュールは当然遅れたが、東日本大震災の影響があったにもかかわらず、執筆者の献身的な努力によって2012年7月に「シリーズ現代の天文学 別巻 天文学辞典」（以下書籍版と略称）が刊行された（図2）。

書籍版の制作当初から、「書籍版とは別に少し遅れてDVD版も制作する。DVD版には、中学・高校さらには大学でも、理科教員が授業を展開するとき安心して使える画像などの資料を加える。」という方針で、執筆者には書籍版には載せられな

いが、適切な画像の提案もお願いしていた。しかしDVD版の制作にはそれなりの経費がかかるため、日本評論社もすぐに制作というわけにはいかなかった。

3. インターネット版への道のり

DVD版制作に進むにはまず経費の見積もりが必要だった。岡村がこの分野の経験豊かな縣に協力を依頼したのは書籍版の出版直後の2012年7月だった。どの項目に画像をつけるのが適当か、すでに著者から提案されているものは妥当か、ほかからの引用で済ませられるか、図を新たに制作すべきか、などなどを書籍版の全項目に対して洗い出し、それにどれくらい経費がかかるかを算定しなければならない。この洗い出し作業は専門知識をもつものが行う必要があった。そこで縣は当時、天文コンテンツ制作で目立った活動をしていた若手グループや大学等の出版担当者にも声をかけてみたが、前向きな対応を示してくれたのは、京都産業大学LLPの京都虹光房のみであった。京都虹光房の大まかな見積もりはわれわれの予想を超えるものであり、これにシステムの開発費を含めるとかなりの金額になる。対象とする画像を絞り込んで、経費を削減できないか。この検討にはなかなか手が見つかなかったが、2015年5月に、往復の機中で時間が確保できるアメリカ出張のあった岡村が最低限の数を調べた。その結果3,000項目中の約1,000項目で写真や図を入れる必要があると結論した。これに基づいて、京都虹光房の小林仁美氏が丁寧に作業手順や費用を見積もってくださったが、数百万円程度の費用が不可欠であることが判明した。当時のわれわれの課題はこの費用をどう用意するかであり、科研費等の競争的資金への申請などを多角的に検討したが実現せず、京都虹光房との相談は残念ながら2015年で中断してしまった。制作協力は実現しなかったものの、京都虹光房の皆様にはたいへん感謝している。

一方、DVD版について日本評論社では電子書

籍（e-Pub）での出版を考慮し始めた。中学・高校の教育現場での活用も重要視していたため、縣と岡村が縁のあった大手の教科書会社にはそれ以前から相談をしていた。制作経費の大まかな見積もりができた時点で、日本評論社と共同で電子書籍を出版することの検討を2013年の秋に再度依頼した。教科書会社から学校利用が期待されるタブレット用のアプリ制作の提案があり、話がほとんどまとまりかけたかに見えた。しかし、最終的に共同出版に関して両社が合意に至らずこの話は2015年秋に消滅した。この時点で先行きが見えなくなった岡村と縣は日本天文学会からの費用等の支援が不可欠であると考え、2015年11月の理事会に「日本天文学会編天文学用語集（仮題）作成の提案」と題した提案書を提出し、日本天文学会の事業として電子版の天文学辞典＝新天文学用語集の作成を願い出ている。

一方でわれわれは、「学術用語集」の将来をどのように考えているかを文部科学省担当課に尋ねた。この時点で当時日本天文学会副会長であった半田が加わった。2016年6月の文部科学省訪問の後で、「従来のような位置づけ・手続きによって『学術用語集』を刊行・改訂することを再検討する。学術用語については、学術コミュニティの自主性に期待するところが大きいので、日本学術会議とも連携して検討を行うことが望ましい。」という文部科学省の方針が非公式に伝えられた。われわれは教育現場で活用できる「天文学辞典」を作成することの重要性を再認識した。

そうこうするうちに出版を巡る情勢は急激に変化した。DVD版、電子書籍、アプリなどでも、書籍版と同様に一度刊行したら修正が容易でない。さらに、天文学に関する最新の知識を教育現場のみならず世の中のできるだけ広い範囲に普及させるには、誰でも無料で見られるようにすべきだ。こうして2016年夏には継続的な改訂が可能な無料のインターネット版「天文学辞典」が目指すべき方向となった。必要経費が獲得できれば、日

本評論社はLaTexの文章および製作した図，Wikiのデータベースなど書籍版に関連する諸権利を譲渡して制作に協力してもらえることになった。

4. 「子ども夢基金」の助成とインターネット版の制作経過

インターネット版制作方針が明確になったこともあり，われわれは「ダメ元」を覚悟で2016年11月に，独立行政法人国立青少年教育振興機構の平成29年度子どもゆめ基金助成「教材開発・普及活動」に日本天文学会の事業として応募することにした。この助成金事業は，2001年に議員立法によって始まった青少年教育事業であった。書籍版はその出自からして研究者向けの色彩をかなりもっている。これをベースにした事業をどう子ども向け教育事業にまとめるのか。2012年からたびたび，「これに応募しては」と話題には上るものの「マッチングが悪い」と二の足を踏んできたが，もはや後がない。まさに藁をもつかむ思いで申請書を書いたというのが当時の正直な気持ちだった。この頃からたびたび打ち合わせに日本天文学会の佐藤良信事務長も参加し支援して下さるようになっていた。日本天文学会の事業としての申請なので，子ども夢基金への申請は市川隆会長名で，機構とのやり取りは佐藤事務長が行った。

一次審査（書類審査）通過は12月22日に通知があり，2017年2月23日の二次審査（プレゼンテーション）に向けて，日本評論社の佐藤大器氏，クリエイション・パドレの小野寺宏臣氏，佐藤事務長，縣，岡村，半田の6名による作戦会議がたびたび行われるようになった。小野寺氏が中心となって，中・高校生や学校の先生にとって使いやすいインターフェイスやデザインを構想し議論の末に仕様を確定した（図3）。このメンバーが現在に至るまで，無数のメールのやりとりと毎月のように顔を合わせて（Skypeも含む）打ち合わせを続けている。幸い無事，狭き門の二次審査も通過し，交付決定通知書が会長宛に届いたのは

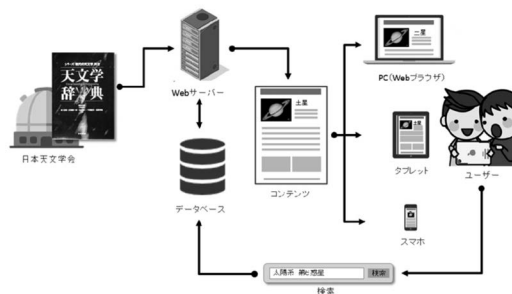


図3 子どもゆめ基金のヒアリングにて提示したシステム構成の概念図。

3月30日，助成金額は申請額8,683千円に対し6,593千円であった。

子どもゆめ基金への交付申請を済ませた4月下旬ごろ，書籍版の執筆者の中から，新たなインターネット版の製作に協力してもらえそうな人を，カバーする分野を考えて世話人が選び内諾を得た。その結果，制作に当たって内容の改訂執筆にあたる13名（世話人を含む；名簿は末尾に掲載）が決定した。また，世話人の岡村，縣，半田のほか日本評論社（佐藤大器氏），クリエイション・パドレ（小野寺宏臣氏）そして佐藤事務長を含めた6名を制作委員会とし，具体的作業手順の相談を進めた。システム全般・データベース制作・ウェブ制作などの設計と制作をクリエイション・パドレが，コンテンツ開発管理，新規図版作成および転載図版の著作権処理を日本評論社が行うこととした。

2017年5月20日の理事会でこの件が審議された。われわれが理事会に提案し了解を得たことは，(1) 理事会，事務局からの支援の下，上記13名からなる天文用語集検討ワーキンググループ（WG）を設置すること，(2) このWGが中心となって，子どもゆめ基金助成金交付要綱に沿って，2017年度中にインターネット版「天文学辞典」を作成し公開すること，(3) 理事会と天文用語集検討WGで今年度中に協議を行い，来年度以降のインターネット版「天文学辞典」コンテンツの維持・管理の方法を定めること，であった。

実質的にWGが動き始めたのは，2017年6月

10日の第1回編集委員会からである。ここで各執筆者に作業内容と手順を説明した。子どもゆめ基金による助成が1年間の事業であることを考慮し、書籍版のインターネット版への移行を第一目標とし、書籍版の大幅な更新は将来の課題とした。今回の作業における書籍版からの変更は、主として書籍版に不足していた図版や動画の追加と、刊行以降5年間に新たに登場した重要語の補充にとどめることにした。インターネット版では全項目2,955のうち1,000項目以上に何らかの図や画像が入っている（掲載許可可否の状況にもよるので数は時間とともに変動する）。このうち107点の図は今回新規に作成した。

インターネット版は、クリエイション・パドレがまだ保有していた書籍版作業用のWikiデータベースから出発することで、一気に改訂作業からスタートができた。ただし、単純な誤植や誤りの訂正だけでなく、出版以来5年間の進歩を反映させる必要がある。さらに、書籍版の文章から出発するので、今後の継続的な改訂を考えると、書籍版の執筆者にはインターネット版に対する著作権の放棄をお願いしなければならなかったが、幸い全執筆者から了承をいただくことができた*3。

子どもゆめ基金の趣旨からして初等中等教育でも広く利用できるものでなければならない。これは重要なポイントの一つである。このために、9月の年會中に打ち合わせが行われ、日本天文学会天文教育委員全員、天文教材委員会の有志3名および、天文教育普及研究会の天文用語検討・活用WGからなる協力者（総勢25名；名簿は末尾に掲載）が、教育現場でも広く活用されることを想定して、用語や図版の整理・確認作業を行うこととなった。

9月以降、従来の書籍版作業用Wikiに代わってWordPressを利用した天文学辞典編集作業用データベースα版を使って要改訂項目の改訂と新規追

加項目の追加作業が始まった。11月16日-12月15日には協力者によるα版上での文章チェック、画像や動画へのコメント挿入等が行われ、それを受けて天文学辞典WGが12月15日以降にこれらのコメントに対応して文章、画像、動画等の修正や追加を行った。2018年1月16日以降、クリエイション・パドレによって、作業用のα版から限定公開用β版のデータベースへの移行作業が行われ、2月1日-3月12日に協力者による2回目の再チェック作業が実施された。子どもゆめ基金助成事業では、2017年度内の一般向け公開および開発教材を用いた教育実践が必須であったため、年末年始を返上しての編集作業、監修作業、改訂作業が行われたのである。

5. 記者発表と会員全体集會での報告

学会事業である本インターネット版天文学辞典の制作状況を会員に広く伝える必要を感じ、2018年春季年會（千葉大）の「教育その他」セッションに講演申込したところ、年會前日3月13日に千葉県庁で行われる記者会見トピックスの一つに選出された。一方、半田はこの日参加できないため、急遽、3月10日にも鹿児島大で同様の内容の記者会見を設定した。また、3月15日の会員全体集會でもβ版をお披露目する機会をいただいた。そこで、3月10日にはβ版を公開することを決断せざるをえない状況となった。

ところが、2月末に「天文学辞典」β版のユーザー・インターフェイスがようやく完成した際、本文中の各用語からのリンクがかなりの割合で正しくつながっていない驚愕の事実遭遇した。これは、Wikiサーバーからα版用データベース、さらにβ版データベースに書き換える際、リンク指定の文法ミスが原因であった。このため例えば、「銀河団」や「銀河群」などへのリンクがすべて「銀河」に、「太陽系」や「太陽系外惑星」へのリ

*3 書籍版の著作権に何らの変更はない。



図4 インターネット版天文学辞典の例。

リンクがすべて「太陽」となる事態が起きていたのである。このため、岡村と縣は公開前後の10日間、ほとんどのすべての予定をキャンセルして、ひたすらリンクの張り替え作業に没頭せざるを得なかった。3千項目に登場する累計で万のオーダーの数のリンクを見て、間違っただリンクを昼も夜もひたすら正しいリンク先に手作業で直し続けた。この予想外の処理作業のため、記者会見に合わせて公開したβ版では、図版の著作権処理やキャプションの表示形式ははじめ不十分な点があくつも残ったままで、その時点で閲覧された方々の中には不愉快な思いをされた方もいるはずだ。制作委員会としてお詫び申し上げる。

公開されたβ版の内容に対して、多くの研究者や関係者から間違いの指摘やブラッシュアップのための提案をいただいた。その意見及び、協力者からの3回目の内容監修に基づき、主に岡村が1カ月かけて修正作業を行った。単純な誤りを訂正し、図版の出典についてチェックし、不正確なものや孫引きを避け、出来るだけ一次ソースを引用先にするほか、キャプションを統一した書式で記述するよう努力した。また、文章や図版の引用ルール等を明確にした。さらに、β版公開後にSNS上で指摘されている不具合や内容の間違い等についても可能な内容はできる限り対処した(図4)。ただ天文学辞典WGメンバーが研究者仲間を持ち帰って相談しないと修正するかどうか判

断できないような、学術的に不確定な用語または分野によって使用方法が異なる用語等については対応が遅れた。

6. 進化する天文学辞典

4月1日に正規版を公開した。これは時期尚早との意見もあったが、国立青少年教育振興機構からの監査と清算払いを待つ身にとっては、助成の条件を守るために公開せざるをえなかった。その後も、TENNET等を通じて意見は次々といたゞいており、制作委員会は学会理事会の指導の下、毎月1回の頻度で会議を開くことに加え、コンタクト窓口 contact-jiten@asj.or.jp に寄せられた意見はできる限り随時、修正・反映できるように努力している。

今回の公開はインターネット版「天文学辞典」が第一歩を踏み出したことを意味するに過ぎない。天文学の研究は日々進歩を続けている。また、多くの方々に使っていただいた結果、より良いものにするためのさまざまな改善点も見えてくるに違いない。この辞典は、学生と研究者だけに向けたものではなく、初等中等教育現場やマスコミを含む一般社会人も重要な対象である。そこで、専門的な見地から正確な記述がしてあることはもちろん大事だが、一般の人が読んで「何を言っているのかさっぱりわからん」という感じをもつような、専門用語を多用した記述だけでは十分とは言えない。難しい用語であっても、冒頭部分は誰が読んでも(数式に基づいた理解ができなくとも)「なるほどそんな意味の言葉なのか」ということが分かるようにすべきである。読み進むにつれて、専門的な記述も出てきて、最後まで読むと研究者でも「よくわかった」という感じをもつような重層的な書き方ができると最高だ。今後1-2年かけてそのような品質向上を目指したい。

天文学用語集検討WGは2018年3月の理事会において、土居守副会長が担当するWGと位置づけられ、名称も「天文学辞典ワーキンググループ」と変更になった。このワーキンググループを中心と

してこれから継続的な改訂を行い、より多くの皆様に使っていただき、この辞典が日本天文学会と社会をつなぐ大きな架け橋となることをわれわれは願っている。そのためには会員の皆様からの建設的なコメントがとても重要である。是非とも皆様からの継続的なご支援とご協力を賜りたい。

インターネット版天文学辞典は日本天文学会ウェブサイトのトップページからリンクしているが、直接のURLは<http://astro-dic.jp/>である。ぜひ、多くの方々にご利用いただければと願っている。

インターネット版天文学辞典制作委員会

岡村定矩（元法政大学・東京大学）、縣秀彦（国立天文台）、半田利弘（鹿児島大学）、佐藤大器（日本評論社）、小野寺宏臣（クリエイション・パドレ）、佐藤良信（日本天文学会 事務長）

日本天文学会天文学辞典ワーキンググループ

縣秀彦（国立天文台：座長）、半田利弘（鹿児島大学：世話人）、岡村定矩（元法政大学・東京大学：世話人）、有本信雄（ソウル大学／元国立天文台）、家正則（国立天文台）、片山真人（国立天文台）、佐々木晶（大阪大学）、関井隆（国立天文台）、中村士（大東文化大学東洋研究所／元帝京平成大学・国立天文台）、中村文隆（国立天文台）、福島登志夫（国立天文台）、二間瀬敏史（京都産業大学／元東北大学）、森正樹（立命館大学）

協力者（所属は2017年度のもの）

有本淳一（京都工学院高校）、石井貴子（京都大学）、石田光宏（横浜サイエンスフロンティア高校）、白田-佐藤功美子（国立天文台）、内山秀樹（静岡大学）、大島修（岡山理科大学）、大西浩次（長野高専）、大山智輝（独協中・高校）、大山真

満（滋賀大学）、金光理（福岡教育大学）、鴈野重之（九州産業大）、衣笠健三（国立天文台）、木村かおる（科学技術館）、阪本成一（国立天文台）、篠原秀雄（埼玉県立草加東高校）、鈴木文二（埼玉県）、高梨直紘（東京大学）、玉澤春史（京都大学）、富田晃彦（和歌山大学）、船田智史（立命館大学）、洞口俊博（国立科学博物館）、前野将太（美星天文台）、松本直記（慶應高校）、矢治健太郎（国立天文台）、原正（埼玉県立豊岡高校）

Internet Encyclopedia of Astronomy Sadanori OKAMURA¹⁾, Hidehiko AGATA²⁾ and Toshihiro HANDA³⁾

¹⁾ Executive Management Program, The University of Tokyo (Todai EMP), 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

²⁾ National Astronomical Observatory of Japan. 2-21-1 Osawa, Mitaka, Tokyo 181-8588, Japan

³⁾ AGARC/Department of Physics and Astronomy, Kagoshima University, 1-21-35 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan

Abstract: We have made an internet version of 'Encyclopedia of Astronomy' open to public as a new project of the Astronomical Society of Japan (ASJ). The whole story and the processes of this project are described in some detail. The project started from the publication of 'Modern Astronomy Series' (completed in 2009), which is one of the 100th anniversary events of the ASJ and is the origin of this project. Then publication of the printed version of 'Encyclopedia of Astronomy' followed in 2012. The internet version has just taken the first step. We will make a continuous effort to improve it, hoping that the 'Internet Encyclopedia of Astronomy' becomes an important bridge between the ASJ and the public. Constructive comments, warm supports and cooperation would be gratefully acknowledged.